

追悼特集 大橋靖雄先生と日本臨床試験学会

大橋靖雄先生と日本臨床試験学会の10年間の歩み

## 日本臨床試験研究会設立

運営委員

樋之津史郎 (札幌医科大学)

3月11日という日が「東日本大震災」以外の出来事で思い出す日になるとは予想もしていなかったし、まさかその日が、大橋靖雄先生がこの世を去られた日として深く胸に刻まれることになるとは到底思いもしなかったことでした。

私は、1993年4月より、週1回月曜日の東京大学疫学・生物統計学教室の抄読会に参加し始めました。だが、週1回では大橋先生の講義を聴講する機会も少なく何も身につかないと思い、筑波大学の医局に許可を得て臨床から離れて、1994年から研究生として疫学・生物統計学教室に2年間在席しました。その後、ヒューマンサイエンス振興財団のリサーチレジデントとして特に腎移植データの整備に関わり、2000年からは薬剤疫学講座の助手として久保田潔先生のお仕事をしながら、疫学・生物統計学教室の実習を手伝ったり大学院生と意見を交わしたりしながら過ごしておりました。2002年に筑波大学臨床医学系泌尿器外科の講師として筑波大学の医局にもどるまでの約9年間、大橋先生の講義を聴講したり、授業の準備を手伝ったりすることができました。その経験は、現在の自分の講義スタイルにどれだけ影響を与えているか、ときどき気がつくこのごろです。そのような私が、僭越ながら、日本臨床試験研究会設立前後の思い出を書かせていただく機会をもらいました。

京都大学医学研究科の薬剤疫学分野に准教授として異動したころより、臨床研究に関わる複数の職種が一堂に会して議論できる場が必要であると、大橋先生がお会いするたびにおっしゃっていたことを記憶しています。それが形として具体化したのが日本臨床試験学会の前身である日本臨床試験研究会であります。大橋先生は、生物統計のみならず、データマネジメントの重要性を説いてこられていましたが、これにメディカルライティングやプロジェクトマネジメントなど、さまざまな業務を行う専門家の養成が必要と考えておられました。そのためには、研究成果を発表する場としての研究会のみならず、

教育機会の提供の場としての研究会の存在意義を強調しておられました。それは、毎年参加されていたASCO (American Society of Clinical Oncology) のannual meetingを参考にされていたと想像しています。ASCOから帰国された時期に計画されていた教室旅行(ゼミ生との懇談の会を含む教室の懇親会)では、夜遅くまで学生や教室員にASCOの教育セッションがどれだけ質の高いものであったか、熱く語ってくださっていました。今では国内の学会の教育講演でも同様に行われている、同じ演題を複数回別の日に実施することなど、多くの参加者が受講できるように工夫してあることを、まるでセミナーのその部屋にいるかのように話してくださいました。

日本臨床試験研究会は設立直後の2010年1月22日にニッショーホールで第1回の学術集会が行われました。このとき私は京都におりましたので、細かな手配やマネジメントをサポートすることは出来ませんでした。しかし、私以外の設立時社員や多くの発起人の皆さんがご努力され、短時間で充実した学術集会を行われました。第1回学術集会に関わられた皆さんの奔走ぶりを想像するにつけ、いろいろな意味で大変ななか、第1回学術集会が開催されて成功されたことが、それ以後の学術集会につながっていると思います。第2回の学術集会は京都大学の川上浩司教授が大会長として大阪で行われました。2日間の会期になったこと、ポスターを委員が評価し優秀賞を会長講演のあとに表彰するなど、いろいろと新たな試みを取り入れました。

第2回学術集会で、もうひとつ大きなイベントであったのが「癌の生存時間研究会」の発展的解消の場としての学術集会であったことであります。日本臨床試験研究会に統計の専門家も多く、また臨床医で統計解析に詳しい先生方も多く参加され始めていたこの時期、「癌の生存時間研究会」の発展的解消と統合を行うことが、日本の臨床試験のレベルアップにつながると考えられたためと推察しています。研究会での大橋先生のご挨拶のなか

でも、「研究会のまとめを宣言するようなことは私にとって初めての経験」と話しておられたと記憶しています。このような希有なイベントをスムーズに進めることができたのは、この時の「癌の生存時間研究会」学術集会を支えられた上嶋健治先生のご努力によるところが大きいと思っております。このように、新しいことを始めるだけでなく、周辺環境を考えて、まとめていくことが重要と思われたときには、タイミングを考えてまとめていくこともされていたことを、昨日のことのよう思い出します。

以後の日本臨床試験研究会は日本臨床試験学会になり、学術集会は毎回2日の充実した内容で行われています。今後も、さらに発展していく情報量の多い学術集会として実施されることと思います。

さて、話を日本臨床試験研究会設立当時の出来事に戻します。定期的に行われていた運営委員会に運営委員として何度も参加しました。当時の会議は、大橋先生の活動計画をお聞きして委員で分担して、その計画を実施していくことになっていました。私は、次々と新しいプロジェクトを提案される大橋先生のバイタリティーに感動しながら、その会議の雰囲気を「楽しんで」いました。実務を担当されて苦労された皆様には不謹慎な言葉に取られるかもしれませんが、当時の私は会議を本当に「楽しみに」新幹線で東京に向かっていました。2013年に岡

山大学に異動し、2018年には札幌医科大学に異動したため、ほとんど会議には出席できなくなってしまい、久しぶりにお会いしたのは2020年1月15日の「10周年記念会」の時でした。その時の印象は、これを読んでおられる皆様と全く同じです。

私が東京大学に出入りしていた頃に、大橋先生はときどきモスグリーンのスーツを着ておられることがありました。現在の日本臨床試験学会のロゴがグリーン基調の配色であるのは、大橋先生がお好きだった色が反映されているのではないかと考えています。学会のロゴを見るたびに大橋先生のスーツ姿を思い出して、大橋先生が日本臨床試験学会で実現されたかったことに、どれだけ自分が貢献できているか、自分自身に問い直しています。

あまりに若くしてこの世を去られた大橋先生の頭の中には、まだまだ新しいプロジェクトがたくさんあったと想像します。そのひとつを連想することすらできない自分に歯がゆさを感じています。また、さらに書くべきことがあると思いながら、この程度の文章になっていることも残念でなりません。ただ、最も残念であるのは、もう学会場でお会いして「樋之津君」と声をかけてくださることがないことであります。ここにご冥福をお祈りしつつ、自分が大橋先生から学んだことを大切にしていきたいと思っています。